

# 日本新興宗教論序説

—天理教の成立をめぐる—

福井直秀

An Introduction to the Theory of New Religions in Japan

—On the Formation of TENRIKYO—

Naohide Fukui

## まえがき

人は何故宗教を信じるか。それは、現実生活（未来も含めて）の矛盾や不安のせいであろう。そして宗教は、例外なく、現実生活の矛盾や不安の根本からの除去によってしか、消え去らないだろう。

だが、ある人はいおう「人々は〈蒙〉であるから宗教を信じるのだ。教育によって人を〈明〉にすれば、宗教はその基盤を徐々に失っていく」と。宗教自体を対象として、そう述べた人には、どの教育書でもお目にかかっているが、「教育によって人は〈蒙〉を啓かれ、バラ色の未来となる」という考えは、かなり一般的であると言える。だが人は決して、「知らない」から、一見〈蒙〉と思える観念を抱くのではない。観念の形成は、往々にして、〈蒙〉ではないかと思いつつも、なされるものである。だから、啓蒙、教化が宗教から人間を救うのではない。

宗教の大枠は以上の通りであろう。だが、この宗教を創唱し、或いは信じる人の観念の世界は、どのように形成、或いは継承され、又、その構造はどのようになっているのか——この問題にアプローチすることは、意味あることと思う。そこで私は、日本の新興宗教（ふつう、幕末以後に創唱されたものがこう呼ばれるが、それらは、既成宗教とは一段劣るような扱いをうけている<sup>1)</sup>）を対象とすることにした。それは、日本においては、それらがヴォルテージが高く現われ、かつ発生が比較的追跡し易いことによる。又、新興宗教の研究は、戦前においてそれらに対決、或いは融和を強いた天皇教の解明の一助ともなるであろう。

私はまず天理教を扱った。それは、独自の神話を持ち、天皇教と別の地点に成立したことで、幕末期の新興宗教の中では、最もはっきりと自分の姿を現わしたからである。

本稿では、紙数に制限があるため、まず“天理教祖中山みき”の成立を扱い、次いで教義の考察をするに止めた。教団、信者等については、次の機会にゆずることとする。本稿は「日本新興宗教論」の文字通りの基礎作業である。

## 第1章 教祖誕生への道

### (i) 神憑り以前

後に天理教祖となった中山みき（1798～1887）の個人史を伝えるものは、教団関係者の証言を

基にしているので、当然みきを‘よく出来た人’‘慈悲深い人’として描き出している。又、みきは、自分の回想談をほとんど残していない。

だが、少なくとも次の二点は、神憑り以前の中山みき像として設定できそうである。まずみきが元々信心深かったということである。伝えられる話では、みきは娘時代尼になりたがったとも、又、浄土宗の熱心な信者であり、19才にして異例の五重相伝（信者に与えられる最高の伝授）を受けたとも、又、願かけなどによく出かけたともいわれている。この信心深さは、後に加持のときの加持台になっている（後述）こと、又一般に、神憑りになるにはその前提が必要であり、従って、この期の新興宗教の教祖がほとんど、元來信仰的雰囲気の中にいたことから、信じていいだろう<sup>2)</sup>。

もう一つは、庄屋の家に生まれ、庄屋の家に嫁いだにも拘わらず、農村婦人としての人並みの苦労はしたであろうことである。たしかにみきは働き者だったらしい。このことを初代真柱の中山真之亮は、その遺稿『教祖様御伝』で「教祖は百姓の如何なる事でもなしたれども、只致さぬものは、溝堀りと荒田をこしであると仰せ給へり」（『教祖様御伝稿案』(㊦)雑誌『復元』3号 p. 4）といっている。苦労の種としては、この他、夫の浮気も伝えられている。

今までの研究は、みきの苦労を特別視し<sup>3)</sup>、苦労故の神憑りであるかのようにいう。例えば村上重良は次のように述べる。

「みきは、じぶんの身体が、この最も偉大な神（「三千世界」を救済する「天ノ將軍」のこと——福井。なお、後述する）のやしろとなることによって、結婚いらい三〇年ちかくの間鬱積してきた一切の不満と苦惱——病氣、あととり息子の難病、家の道具として強制されるあらゆる忍耐、夫にたいする内攻した感情、日々の苦しい重労働——から一挙に解放された。今やみきは、その全生活を何びとも侵すことをゆるされない神の權威で困ってしまうことができた。神がかりは、みきにとって自己を確立する唯一の道であったし、神のやしろ＝生き神として宗教的權威を負うことは、あらゆる現実の權威に優越しえたことを意味していた」（『近代民衆宗教史の研究』p. 112～p. 113）

又、小栗純子は更に極端にいう。小栗はまず「夫との『千里もへだたった』冷えきった夫婦生活」（『日本の近代社会と天理教』（p. 22）を紹介し、ここから「大ぜいの犠牲と奉仕の上に、將軍が、大名が、家長というただ一人の人が幸福を一人占めにするという当時の幸福のあり方に疑惑を抱きはじめていたのである。……みきは夫婦が手を取りあって働く、いや全家族そろって労働する、貧しくはあるが充実した貧農の生活に幸福の原型と出発点を見い出していった。新しい価値観と幸福観のめばえである」（p. 22～p. 23）と一気に跳びこえる。

これらの見解の誤まりの原因（方法論的誤まりが背後にあるが、それはここでは措く）は次の点にある。即ち、みきに憑いた神を「三千世界の救済者」とする教団「正統」史をそのまま認めただことである。ここから、みきの神憑りを一気の解放とし、それ故、強い抑圧感があつたに違いないとされたのである。

だが、みきの神憑りを‘三千世界救済のため’とするのは、教団による權威付けでしかない。そこで次に、神憑り自体を問題とする。

#### (ii) 神憑り

天保9年（1838年）みき41歳の時、神憑りとなる。みきはそれ以前より、出産後で体調不調であったが、息子秀司の足痛治療のための何度目かの寄加持で、巫女の代理に加持台を勤める。この寄加持とは、山伏、加持台＝みき、病人＝秀司とからなり、山伏が病人に憑いている霊、或い

は病気をもたらしている神を加持台に移し、その霊（或いは神）と対話し、その霊（或いは神）の判別、病気直しの処方をするものである。悪霊、物怪の場合<sup>4)</sup>は無条件に追い出す。神が病をもたらしている場合は、例えば、“×月×日に、△△神の宿る○○岩を踏んだので、足が悪くなった”という内容のもので、燈明をあげたりして、謝罪することで、病を除いてもらう。この神＝加持台が話す内容については、神が対策、処方という場合と、術者が判断する場合があります。

みきがこの加持台となっていたとき、突然みきに神が憑く。教団「正統」史では、この時みきは「我は天の将軍なり。此屋敷は天より深き思惑ありて、此度天降りしなり。今より親子諸共に神の社に呉るなら、三千世界を助けさそう。否といふなら、此家断絶に及す」（「御教祖伝史実校訂本」中一『復元』30号p. 37）といったとされている。

だが、みきにいきなり「三千世界」を救済せんとする神が憑いたとする見解には無理がある。以下、ほとんど資料のない状態ではあるが、みきが教祖となっていく過程を推論していく。

まず、この過程の検討に必要な年表を作る。

- 1838 天保9 みき神憑りす  
 〵 この間不明\*
- 1849 嘉永2 夫・善兵衛、「神」が離れるようみきに刀で迫ったらしい\*
- 1853 嘉永6 夫・善兵衛没
- 1854 安政元 帯屋許し（安産と出産日調節の呪術）を始めてしたとされる
- 1861 文久元 元治にかけて、後の本席飯降伊蔵ら高弟9人入信
- 1864 元治元 肥のさずけ\* 扇のさずけ\* をする
- 1867 慶応3 正月～8月『みかぐらうた』\* の制作。4～5月『御神前名記帳』。\* 7月吉田神社の傘下に入る\*

この年表について説明を加えておく。

- \* 天保9年以降について、教団「正統」史では、救済のためには「貧に落ちきる」ことが必要であり、従って施しを重ねていき、遂には没落したとされている。
- \* 善兵衛はみきの神憑りをいやがったようである。労働力の減少であるし、又、巫女自体「高貴」な仕事ではなかったからでもあろう。
- \* 肥のさずけとは、授けを受けた者が、糠三合、灰三合、土三合をあわせた肥を田におくと、肥一駄の効果があるとするものである。
- \* 扇のさずけとは、みきが、特に熱心な信者に許した術で、扇をもって神前で伺いをたて、それにより神意を知ることができるとするものである。
- \* 『みかぐらうた』は“真実の心になれば、病もなくなり、豊作になり、陽気ぐらしができる”といわれ、完成された教義の基本線があらわれている。
- \* 吉田神社の傘下に入ることを申請するとき、大和国の神官取締り職・守屋筑前なる人物の入れ智恵で天理王命を構成する神を作った。だがそれは、後に確立する神話の神と合っていない。又この神は、『古事記』に出てくる「神世七代」の神と幾分重なっている。そこで比較のため、この時点の天理王命（12神）と後の10神、「神世七代」を挙げる。なお、順番は掲載通りである。

天神12神：国常立尊、国狭槌尊、豊斟淳尊、大戸道尊、大戸邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊、大日鬘尊、泥土煮尊、沙土煮尊

天理10神：<sup>くにとこたち</sup>国常立命、<sup>おもたり</sup>面足之命、<sup>くにとこ</sup>国狭土命、<sup>つきよみ</sup>月読命、<sup>くもよみ</sup>雲読命、<sup>かしこね</sup>惶根命、<sup>たいしよくてん</sup>大食天命、<sup>おうとのべ</sup>大斗之弁命、伊邪那岐命、伊邪那美命

神世七代：くにのとこたち 国常立神，とよくもの 豊雲野神，うみちに 宇比地邇神，いもすひぢに 妹須比智邇神，つぐひ 角杵神，いもいくぐひ 妹活杵神，おぼとのち 意富斗能地神，  
いもおぼとのべ 妹大斗乃弁神，おもだる 於母陀琉神，いもあやかしこね 妹阿夜訶志古泥神，伊耶那岐神，妹伊耶那美神

\* 当時の願い事を記した『御神前名記帳』によると、2回以上きた人がほとんどなく、又、願い事は、病氣平癒、安産が圧倒的であり、その他は2174例中、紛失、縁談、悪夢、商運が全部で数例みられるに過ぎない。ここから、病氣直し、安産に効く神としか思われていなかったことがわかる。

『御神前名記帳』の例、及び、もっぱら病氣直し（安産も含む）の神といわれていたことからわかるように、みきは、いきなり「三千世界」を救済しようとしたのではない。病氣直しを専らとしていた割合長い時期があるのである。慶応の時期には、信者も揃い出し、教義も確立されてきたにも拘わらず、世間的には、病氣直しの流行神としてしか考えられていなかったことをあらわしている。

では次に、みきが教祖になっていく過程を考察せねばならない。みきは、術者により憑依させられる加持台から、自ら憑依する巫女となる（「巫女」とは広い概念であるが、自ら憑依し、神の託宣を述べ、かつ教祖として成立していない時期のみきをここではこう呼ぶ）。みきは術者の役割も負う。即ち、自由に憑依状態となり、又、処方も与えることになったのである。

病氣直しは具体的には次のようであろう。神憑りになることによって、病人と同じ心性になり、病人の方で思い当たる病気のなり方（例えば神への無礼行為）をさぐる。そしてそこから「神」へ帰ってきて、神の言葉として託宣を述べる。病人は治癒への精神的根拠を与えられて、あるいは直る。この病人の心性と同一化する能力は、即ち神の仕業として自己認識される。それが、自分に神が憑くことなのである。

さてこの場合、病氣直しの論理構造はどうなっているのだろうか。病氣直しの前提は、人間にとって未知な部分を神が支配している、という観念が元々もたれていることである。そして病氣自体については、何故か知らないが病氣になった（ここに悪霊の存在をみてもみなくてもいい）、これを神が恩恵として直してくれる<sup>6)</sup> という場合と、神が罰として病氣をもたらしたという場合がある。神の意志という点からは、後者が進んだ形である。

みきの場合、神が病氣をもたらずのだ、という観念の形成は容易であったろう。みきは、帯屋許しという出産日調節と安産の呪術を行なう。この出産では、受精を中心として、そのもつ神秘性故、そもそも人間は神が造ったのだ、との認識にすすみうる。そして、この点を承認すれば、病氣も人間を造ったモノ＝神こそが直せるとなる。

このようにみきは、神を得るようになった。だが、このままでは、病氣直しの技術をもった巫女でしかない。靈感のうすれゆくままに流行らなくなっていく。教祖になるためには、次の点について観念の世界が展開されねばならない。一つは病氣原因の内面化であり、もう一つは、不可欠でないかもしれないが（みきの場合は、これをなした）、守備範囲の拡大である。

病氣直し技術の切り売りを越えるには、罰を受けないための倫理的な日常生活を説く必要がある。その場合、自分の人生経験がそのもととなる。みきの場合、病氣を、欲を捨てて真実の心となるための神の警告としていった（詳細は第二章の教義の節参照）。ここから、病氣平癒に限らず、家庭不和の解消、人間関係の改善などももたらそうとするのである。

守備範囲の拡大は、このように、病氣直しの側からも招来されたが、みきの「神」の側からも又、然りである。みきの神の場合、そもそも病氣直ししかしないという理由はなかった<sup>6)</sup>。病氣直しがたびたびうまいくと、みきは当時流行の「生き神様」<sup>7)</sup> としても祭り上げられたらう。

そもそも人間を自らの自由にし（教義確立期から見た場合、人間を造った故）、そして本来未知な部分を支配する神なら、救済を求める人の要求に応じて、その他天候なども支配しようと考えられるようになることは、当然であろう。みきの神の展開の側からは、このように、教祖となっていたルートをひきうる。

だがみきの場合、“三千世界の救済”（言葉の真の意味での「三千世界」ではなく、人々が救済を望むすべてという意）という言葉は、単に守備範囲の拡大としてあったのではない。救済された世界の明瞭なイメージと共に形成されたのである。みきはそれを「陽気ぐらし」（後述）と書いた。皆が陽気に暮らせる宗教的悦楽の世界、これこそ一切の關係の救済である。

かつてみきは、長い間病氣直しをしていた。このときには、宗教的世界の完成された姿などありえない。みきの場合、「陽気ぐらし」のイメージを得ることで、質的に展開されて教義を形成していったといえよう<sup>829)</sup>。

## 第2章 『みかぐらうた』『おふでさき』の世界

みきは慶応3年から明治14年にかけて『みかぐらうた』『おふでさき』を執筆している。この中には、天理教の教義、時の政治権力への認識、その他、みきの側近、家族への指示、配慮が少しある。側近、家族への言葉の項は別稿にゆずり、ここでは前二者について述べる。

『おふでさき』は、明治2年に1, 2号、そして7年以後は3~17号が書かれたが、これを検討するについて、二つのことを述べておかねばならない。一つは、2号の後半から後へかけて徐々に、政治権力への認識が硬化していくことである。二つは、7年の時点で、天理教の神話たる『泥海古記』が整ってくるということである。

このように『おふでさき』は、全期間にわたって同じであるわけではない。『泥海古記』の整うことで、若干明瞭になった部分もある。だが、教義的な骨子は、『みかぐらうた』及び『おふでさき』1号、2号時代に既に揃っている。だから、まず、教義を全期間を通して論ずる。そして変化していく政治権力への認識については、時代を追って述べることにする。

### (i) 教義

天理王命は、人間を造った神だとされる。このことを慶応2年の『みかぐらうた』では、「この世の地と天とをかたどりて 夫婦を拵へきたるでな これハこの世の始だし」という。そして「日の本庄屋敷の 勤めの場所ハ世の元や」「ここはこの世の元の地場」（『同』）と、今みきのいる庄屋敷こそが、人間を造った場所である。だから「その因縁で天降りたで」（『おふでさき』④-55。『おふでさき』は号と番からなっている。以下(号)一番のように記す）とみきの神憑りは、この世の初めに、人間を造った神が、救済を目的とするからだとされる。

この人間制作の具体的様相はどうであったか。これをみきは『おふでさき』6号（明治7年12月）でまず述べる。次いで、何度も口述していく。これを筆写したとされるのが、明治14年以降に成立した各種の『泥海古記』（単に『古記』ともいう）である<sup>10)</sup>。

この『古記』のあらすじを述べよう。

＜この世の始まりは、人間も国土もなく、泥の海ばかりであった。その中に月と日の二神だけがあった。二神だけでは退屈な故、人間を造って、守護し、彼らの「陽気ぐらし」を見ようと決めた。人間製作のためには、種苗代と道具（器官等）がいる。辺りを見渡せば「ギギョ」という魚と「巳」とがいる。前者を種とし、後者を苗代としようとした。更に見渡せば「鯪」がいる。これを貰うけて、食べて味わうと、勢が強くしゃくばるので、これから男性器を作ることに決め、又、人間の骨の守護を司どらせることにした。次いで「亀」を味わい、女性器、人間の皮つなぎ

の守護と決めた。このようにして、「鰻」は人間の飲み食い出入りの守護、「かれい」は人間の息、風の守護、「黒くつな」は立毛、即ち地より生えるものを引き出す守護、「ふぐ」は人間の生死の時に縁を切る守護とし、其の他此の世の万ず切るもの一切の守護と決めた。

それから、「ギギヨ」に「鯨」を仕込み、「巳」に「亀」を仕込み、999,999人を3日3夜に宿し込ませた。それが3年3月胎内に止まりて、人間を生みおろした。その人間は5分の大ききで生まれたが、99年かかって3寸まで成長して皆死んだ。そしてまた、母の胎内へ宿り込み、また5分から生まれて、99年目に3寸5分まで成長して皆死亡した。もう一度同じようにして、4寸まで成長して死亡した。そしてその後、鳥類、畜類、虫類に8008度生まれ変わり、その死亡するとき猿一匹残る。これがもとの亀であった国狭土の命である。そしてこの人が5分の男女を生み、彼らの次の世代で遂に5尺となり、今の人間となった。それと同時に進行的に天地海山が分かれていった。

月神日神は、既に、人間を造る道具になった生物をそれぞれ神としていった。「ギギヨ」が伊邪那岐命、巳が伊邪那美命、鯨が月読命、亀が国狭土命、鰻は雲読命、かれいは惶根命、黒くつなが大斗辺命、ふぐが大食天命である（漢字は本により異同がある）。この八神と月神=国常立命と日神=面足命を合わせて十神とし、それらの総称が天理王命である<sup>11)</sup>。

前述したように、『古事記』の「神世七代」の神と名称がかなり一致しているところからみて、『古事記』を意識して書かれた可能性もある。それにしても随分具体的に述べられ、かつ長い年月かかって作られたことになっている。しかし、このうち重要であり、従って『おふでさき』にも登場しているのは（即ち、後からの改作の可能性がないのは）、各道具衆の役割と（魚たちが後、神になったとする点は『おふでさき』にもある）、人間が胎内に3度宿って4寸になったまでである。

この神話の特徴は、国生み神話がないこと（後半でも国土は自然に出来てくる）と、人間を造る目的が「陽気ぐらし」を楽しませるためであるのと（これは『おふでさき』にもある）、人間制作のときの守護神に、立毛、即ち豊作の守護をさせていることである。

この神話の意味は、教義の検討を待って解明されうる。だから、みきが人々に何を説こうとするのかからはじめていく。天理王命は、人間を造った神である<sup>12)</sup>。そして守護も司どっている。従って人間を救済できるのである。ところが、この事を人間は皆知らない。そこで、この神が今、みきの体を借りて「表へ現われて」「この元」（『みかぐらうた』）=救済の理を説く。では救済の理とは何か。これが教義の中心内容をなしているのである。

人間は元来、神=天理王命（以下、神とのみ書く）が造ったもので、元来、汚れなきものである。ところが、現在の人間は悪の中で暮らしている。これは、人間が心の中に前世からの「埃」を蓄積しているからである。この埃に対して、みきは、「悪しき」も「一寸埃がついた故なり」（①—53）と実に簡単に考えて、埃は「欲」心であるから「欲」を捨て、「三歳心」（子供のような心のこと。後には③—99等で「真実の心」といわれる）になり、「神に凭れて行」けばよいとする。そうすれば、神は「病の根を切り」、「肥の授け」（以上『みかぐらうた』）を与え、健康で豊かな生活=「陽気ぐらし」を実現させるとするのである。「神楽や手踊り」は、神の助けを求める行為で、乞い求める「陽気ぐらし」を象徴するものであり、「日の寄進<sup>13)</sup>」は、神へ凭れかかることの表現である。

今、私は「神が『病の根を切り』り……健康で……を実現させる」といった。天理教は、病がなくなり、豊作である状態を切実な課題としているから、こういうこともできる。だが、天理教の

教義という点では、不正確である。まず病氣観を検討していこう。

天理教では、「人間が「真実の心」となる結果として、神が健康にしてくれる」というので完結してはいない。人間は、「埃」の中での生活をしている。これを神がみて、陽気ぐらしに導こうとする。そこで、心を澄ませるよりの警告として病氣を与えるのである。人間は病氣に苦しみ、ここから神の真意を知る。そうすると、「埃」をぬぐい、心を澄ませて、神に凭れる。そこで神が病氣を除いてくれるというわけである。このことをみきは、「何れにても病痛みは更になし 神の急き込み手引きなるそや」(②-7) といっている。

ここで気付くことは、本来最も忌むべきはずの病氣は、神から与えられたものとなっていることである。前節で触れたが、病氣直しの向こうに、人間の倫理の問題をみているのである。家庭不和等の人間関係に属するものを、一切個々人の心の問題に解消し、「埃」がなくなりさえすれば、それらも片付くとしているのである。

神が人間を造ったのだから、病氣の件については一応説明がつく。だが、「肥のさずけ」についてはどうなのだろう。この理由については、例えば「欲を忘れて日の寄進 これが第一肥となる」(『みかぐらうた』)としかいわれないが、『古記』にみたように、神は植物の生長も支配しているから、豊作ももたらせるが、それを、「真実の心」をもった人にだけ与えるため、「肥のさずけ」といわれるのであろう。

この単純さは何故だろうか。それは、みきが想定するのは、教義的本来としては、農業民ではないからである。心身共に健康であり、豊作でありさえすれば、陽気にくらせる農業世界を思い描いているからである。

ここで先程の神話『古記』を思い起こしてみよう。『古記』には、国生み神話がなかった。それはそもそも、支配ということを想定していないからである。また、人間の体の守護神と豊作の守護神しかなかった<sup>14)</sup>。その二つが保証されさえすれば、元来意図された「陽気ぐらし」はすぐ実現される——そんな農業世界を想定しているのである。

農業世界しか考えていない理由として、「埃」の内容があげられる。初期は「埃」を、ただ「欲」としているだけである。これが商業民を視野に入れていたのなら、「欲」自体についての考察がなされているであろう。この「埃」は後に「惜しい欲しいと可愛いと 欲と高慢」(③-96)とされる。が、それでも「高慢」を除いて、他は「欲」と総括してもいいだろう<sup>15)</sup>。

このように天理教は、「陽気ぐらし」を間近いものとする。だがこれは、本来、造物主たる神の意志が貫徹すべきだから、人間はすぐ「真実の心」をもつはずだ、という原則論であるし、また、現実には、外向けの顔、即ち、天理教に入信させようと鼓舞する論理である。

だが、神の方から見ず、人間の方から見れば、「真実の心」になりきるのは、極めて困難である。その困難さを天理教は、前世からの「埃」のせいにする。「埃」が前々から積もっているというわけである。

ここで天理教の死生観を述べておかねばならない。天理教では、死は「出直し」といわれる。一度死ぬと、ある一定の時間をおいて再び生まれかわる。この場合、前世の因縁を引継いで何度も生死を繰り返す。だから死は、「出直し」となるのである。この死生観は実にあっさりと思われている。例えば、病氣直しが成功せず、死んでいく時、「病人本人の責任により埃を払えなかったから、出直しだ」という具合である。もっとも逆に、天理教にとって大切な人は、次の生での活躍を期待されて出直すのだが。

以上、要するに、天理教は、原理的には、「陽気ぐらし」を間近に見るのだが、現実には実現

されない原因、それを個人の「埃」に求める。だから、逆に、「陽気ぐらし」が実現しないのは、個人の「埃」のせいであるとして、更なる信仰を求めていくことにもなるのである<sup>16)</sup>。

だが、ここで「陽気ぐらし」の実現を、「ご利益」の側から考えてみよう。天理教の布教は、病氣直しを中心としている。だから、病気がきっかけでなった信者にとっては、病気が直るかどうかが、極めて切実な問題である。だが、天理教の採る精神療法では、直る場合もあるだろうが、そううまくいかないだろう。その場合、本人の「埃」のせいにして、更なる信仰生活を求め、その結果「心が洗われ」、安らかに「出直し」を迎えることがあり得る。この場合、病氣直しの失敗は、失敗として認識されないだろう。だが、直ることもあってはじめて、天理教は成立してきたのである。

ところが、「肥のさずけ」となると、これは極めて奇妙に思える。いくら効かないときは本人のせいにしても、そもそも効く根拠がない。それは、明るい未来を煽っているからとしか思えないのである。天理教の「陽気ぐらし」の間近さは、教義からだけではなく、やはり、当時の社会情勢の影響も受けていると考えられるのである。

(ii) 天理教をとりまく政治・社会情勢

『みかぐらうた』二下り目では、次のようにいわれる。

「とんとんとんと正月踊り始ハ やれおもしろい ニツふしぎな普請かかれバ やれ賑しや  
三ツ身につく 四ツ世直り 五ツ何れもつきくるならば 六ツ謀反の根を切らふ 七ツ難渋を救  
ひあぐれば 八ツ病の根を切らふ 九ツ心を定めるやうなら 十デ所の治まりや」  
にぎやかに「世直り」が歌われている。

高木宏夫はこの『みかぐらうた』と「えゝじゃないか」との類似性を説く。そして「この『みかぐらうた』は、『えゝじゃないか踊り』の最中迄書かれたことになるから、『みかぐらうた』の中へ、この世相がそのまま反映していることは、むしろ当然であり」（『宗教 教団の成立過程』『東洋文化研究所紀要』第六冊 p. 298）という。だが、『みかぐらうた』が「えゝじゃないか踊り」の最中迄書かれたかどうかについては、問題がある。

「えゝじゃないか踊り」は藤谷俊雄の『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』によると、慶応3年8月尾張、三河、遠江におこっている。京都でも8月28日である。当然大和へ広がったのは、もう少し後であろう。一方『みかぐらうた』の執筆は、一様に慶応3年8月迄とされている（『御教祖伝史実校訂本』中二『復元』32号 p. 490～p. 491）。

高木のように「えゝじゃないか踊り」と限定すると疑問は残るが、それに先立って慶応二年、「世直し」と称する一揆が頻発している。かつての明和の「おかげまいり」も、文政の「おかげまいり」も百姓一揆と密接な関係をもっている故、百姓一揆の頻発は「おかげまいり」=宗教的解放への期待をつのらせたとは充分考えられる。この民衆の期待感は、慶応3年の「えゝじゃないか」が、いわゆる「おかげ年」（60年周期）ではないのに、爆発的に拡がったことから類推できる。「陽気ぐらし」が間近いという感覚に、民衆の＜解放＞への期待をみていだろうか。

百姓一揆、「えゝじゃないか」、そしてそれに続く新政——みきの新政への期待は明治初年まで続く。みきは『おふできき』2号で次のようにいう。

「上たるは心勇んで来るほとに 何時に来る刻限が来た」（②—2、上に立つ政権担当者が陽気ぐらしに向かおうとしているから、救済の時が来た）

「この勤め何処から来ると思うかな 上たる所勇み来るぞや」（②—4、この陽気勤めはどこから来るか、上に立つ政権担当者がまずそれに向かっていくからだ）



だが、この時点ですら、政権担当者への不満が芽生えている。2号の後の方でみきは、「唐人日本のが地へ入込んで 尽にするのが神の立腹」(②—32)、「高山の日本の者と唐人と 分ける模様もこれも柱や」(②—46、政権担当者の中に、外国思想にかぶれた者がいる、これを取除けば、基礎が定まるのだ)という。既に新政が「陽気ぐらし」と無縁だったことを覚っているのである。

この後みきは、権力への不信を示す。そこで一方で権力内部への布教を主張し、他方権力に代わって救済できることを示すための対決を説く。前者は、「この道を上を通りた事ならば 神の自由すぐに現す」(④—115)といわれ、後者は、「これからは神の力と上たるの 力比べをすると思へよ」(③—83)などといわれる。

明治7年12月になると、権力の方から、天理教に対して弾圧がかけられてくる。既に政府は、明治6年1月「梓巫市子憑祈禱狐下ヶ等の所業」を禁じ、更に7年6月に「禁厭祈禳をもって医菓等を妨ぐる者取締」の通達を出していた。政府のこの方針は、前者で「人民を眩惑せしめ」といわれ、又、既に5年の京都府令による盂蘭盆禁止の布告で「従来の流弊、……未だ熟せざる果穀を采って仏に供し、腐敗し易き飲食を作て人に施し、或は送り火と号して無用の火を流し、……又は千日の功德に満る迎之が為に数里の歩を運ぶ杯、畢意悉く無稽の謬説附会の妄誕にして、徒らに光陰を費し無益に天物を暴殄し、且追々に文明に進歩する児童の感ひをも生じ候事に付、自今一切令停止候事」といわれるように、啓蒙を旨としている。政府の手で人民を「教育」しようとの「後進国」流の政策である。だが、これが、基本的には、天皇教と対立しない宗教しか認めない宗教政策と相俟って、新興宗教への弾圧をすすめていく。

天理教弾圧のはじまりとなった事件は、側近が近くの大和神社に論戦を挑んだ、それが警察へ訴えられて、祭祀道具を没収された、というのである。政府の公認を受けない天理教は、これ以後、存在そのものに対する弾圧を受けるのである。

これに対してみきはどのような態度をとるか。みきは依然として政権担当者への布教は捨てていないが、対決姿勢を強め、威しをちらつかせる。

「この返し大社高山取り払い 皆一列は承知していよ」(⑥—115、大社とは保護を受けている神社であろう)

敵対してくる権力に対する「返し」とは何なのか。一つは災害をもたらすことである。

「この世界山ぐゑ等も雷も 地震大風月日立腹」(⑥—91、月日とは神のことである)神には出来ないことはないと素朴に恫喝する。

もう一つは、天理教の人間観による「返し」である。即ち、政権担当者も、元来神=天理王命が造ったものだから、神が身体を自由にできる。そこで「高い所」(⑩—75)の「体内」へ「入込む」(以上⑩—74)。即ち、病気をもたらすということである。政権担当者よ改心しろ、ということになる。みきは、このように基本的には、「政治」として見ず、政権を担当する人間の問題としてみて、皆神の子であるから、神の意志に従え、とするのである。

だが、現実に弾圧を被るとき、みきの言葉はゴマメの歯ざりしりでしかない。詳しくは次の機会に論じるが、この問題について、教団内でみきと側近は大きく食い違う。みきは、原則論を貫いて譲歩しようとしなない。側近は、ひたすら権力を恐れる。これは勿論、宗教教団の存在の仕方の問題であり、それは、戦前の宗教教団の一つの典型を示していよう。だがこれは、天理教の教義の位置からも導かれる。

前にみたように、天理教の教義は、「政治」を視野に入れず、宗教的悦楽の世界を作っていた。それは国生み神話の欠除などにも認められる。このことは、二つの方向性を示唆する。一つは、

あくまで、神による人間制作を維持し、天皇教神話と対決する道であり、もう一つは、国生みを天皇教神話に任せ、その分、人間制作神話をも放棄していく路線である。前者が、『おふでさき』の世界であり、後に分派活動をした大西愛治郎の「ほんみち」である。後者が、天理教が後に辿った道である。それらについては、別の機会に詳述する。

註

- 1) さる52年7月の津地鎮祭最高裁判決で、長官は、宗教の国家からの独立を主張したが、その背後には、キリスト教徒たる彼の「宗教的信念」があったとされる。だが、その主張は近代国家の原理そのものであって、何ら「宗教的」ではない。しかし仮りに、彼がもし、何らかの「新興宗教」の信者であって、その「宗教的信念」に基いたものなら、反応は冷淡であつたらう。
- 2) みき自身の言葉では、「わしは子供の時から、いんきないんきなものやっただ、人よりの中へは、ちょっともでる気にならんたものや」（諸井政一『正文遺韻』p. 22）といわれている。どちらかという信仰へ向かう心性だったことへの傍証にはなる。
- 3) 夫婦生活は極めて冷たかったとされている。それは村上重良が、『近代民衆宗教史の研究』で「早朝から深夜までつづく労働のなかで出産し子女を養育する妻と、身勝手な夫との間には、精神的にふれあうものではなく、『千里も隔ったような』心を抱いての不幸な夫婦生活がつづいた」（p. 101）といい、それ以後の研究者が（多分孫引きで）右へならえしたからである。だが、「千里も隔ったような」の原文は次のようになっている。

「○沢田善助さん（善次郎の父）から聞いた話『心と心と合うたら、みちのりどれ程隔たつても、だきついて寝てるようなものや。だきついて寝ても心が隔つたら、千里も隔ったようなものや』と教祖様が仰っしゃつたと云う」（梶本宗太郎「教祖様の思い出」『復元』18号）

みき自身の回想ではなく、夫婦一般論なのである。

- 4) 堀 一郎『日本のシャーマニズム』p. 162 にその例が載っている。
- 5) 近世に多く流行った御利益ある神はこうである。
- 6) 近世の流行神では、一般に、それぞれの理由から、祈願の専門領域が決まっている。例えば、浅草奥山の三途川老婆は、その像の前歯が欠けていたので、歯痛直しの神とされた（宮田登『近世の流行神』p.44）。
- 7) いつの段階からかわからないが、みきは、病氣直し、帯屋許しを息をかけることで行なった。みきの「息」自身が効力のある神の息だったのである。
- 8) なお天理教成立の理解のための一助として、天理教とよく対比される同時期の新興宗教金光教の成立の仕方にふれておく。

金光教祖川手文治郎には、元来崇りの神であった良の金神が憑く。文治郎はこの神を天地の祖神へと転倒し、全ての神の中の代表とする（例えば、天照皇大神とも並存させ、彼は日本の神、金神は三千世界の神とする）。そして、一心に金神をおがむことによって、心の中で神と合一化する、そのことで神からの利益を受ける、として、あらゆる現世利益付与を中心に布教していく。守備範囲の拡大は、金神の肥大化に伴ってなされている。

- 9) 「三千世界」を救う天輪王、或いは天理王命は、どこから出てきたかという問題は、たいして重要でない。それは多分、みきについていた神が、ある時期から天輪王とされ（仏教の転輪王からきたといわれている）、そして吉田神社の傘下に入るなどで、神道色を強めていった頃、天理王命となったという位でしかない。天輪王、或いは天理王命だから「三千世界救済」ではなく、ただの病氣直し巫女の段階でも、由緒ある神仏の名前を冠しうるからである。
- 10) 総称が『泥海古記』『古記』である。各版の題は『泥海古記』の他、『神代乃古記』『神の古記』等がある。いずれも内容は近似している。
- 11) なお注意しておかねばならないのは、天理教では十神を並べているが、八神は単に道具でしかない。神の意志といわれるときは月日の意志であり、さらに月日の間に区別はなく、月日の意志は一体のものとなっている。
- 12) 人間は神の被造物という考えは、今見たように徹底していて、人間は神からの「借り物」でしかないといわれる。

福井：日本新興宗教論序説

- 13) 後、大きな教団などを作る原動力となった日の寄進は、「屋敷の土を掘りとりて 処変へるばかりやで」(『みかぐらうた』)といわれ、もともとは労働心にしか意味を付していない。
- 14) 「風の守護」「万ず切るもの一切の守護」というのがあるが、共に人間に関するもの「息」「死」からの延長である。
- 15) なお、現在の天理教教義では、さらに、「憎い、恨み、腹立ち」を加えて「八埃」と呼んでいる。
- 16) この信仰の強化として布教を持ち出し、万人布教師化の論理を出すのだが、それは次の機会に詳述する。

(博士課程大学院生)